

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

宗教的な真実に出^で遇^あう

—かくの如くに自分は聞いた—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第4回と第5回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第4回並びに第5回では、「普賢大士の徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第3回からその一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

■ 「仏説」—生きた宗教体験の伝承

『仏説無量寿経』（『大無量寿経』）という経典、経典には必ず「仏説」とつくといってもよいわけですが、仏陀の説法です。この『無量寿経』の教主世尊は、釈迦牟尼世尊で、釈迦牟尼世尊の説法ということになるわけです。しかし経典というものは、語られた方が書いたものではない。釈尊が亡くなられたあと、語られた言葉を聞いた人、つまり、お弟子方が集まって編集した。お釈迦さまがこういう言葉で語ったということを誰が証明するかと言えば、聞いた方がお互いに、「あの会座では、あの場所では、こういうことをおっしゃった」「ああ、そうだそうだ」ということで編集していった。そしてまた、お釈迦さまは衆生を救うために、「対機説法」と言われますけれど、相手を見ながら、その人その人に応じた言葉を探して、語りかけられた。ですから、人によって、場所によって、教えの言葉が違う。そういうことで、教えの内容は、さまざまな可能性、さまざまな方向性を最初から孕んでいたと思われま

聞いた人の耳に残った言葉があるわけです。聞いた人が、「私は、このように聞いた」と。聞いた人が理解した限りにおいて残る。ですから、もし“お釈迦さまという歴史上の人物が説いたことだけが仏説だ”という、そういう考え方であったら、仏説というのどこにもないわけです。お釈迦さま自身が、「私が、そう言ったよ」ということがないので。タマネギではありませんけれども、後からついたものは全部不純だから外して行って、一番最後に残ったものが純粹だという考え方で、もし仏説を、衣を脱ぐように脱がしていったなら、何も残らないはず。聞いたもの以外にはないので。それが、「仏説」というものの宿命です。

この『無量寿経』という経典は、原典研究とか文献学というような立場からすると、お釈迦さまが説いたはずがないと。大乘仏教が出てきた紀元前後ごろに、どこかで編集されたものであろうと。だけど、仏説は全部、聞いてきた伝承が伝えているのです。いわゆる文献学などからすると、古いものほど正しいという考えですが、そうではなくて、聞いた方が、仏陀が教えようとした方向性に向いてたすかったかどうか、それが、仏説が真実であることを証明する。そういうところに、仏説という言葉の不思議さがあるのです。

「仏説である」と、どこで証明するのか。誰も証明できないのです。伝承以外には証明できない。伝承が証明するということは、宗教的真理が伝えられ、それでたすかった人が、新しく新しく生まれてきて、その人が、これが仏陀の説だと信ずるしかないのです。「ああ、これが

本当だ」と頷^{うなず}いてきた歴史が伝えるのです。つまり、宗教的眞実というものは、言葉になって新しい体験を生み出してこそ意味があるのであって、言葉だけが遺^{のこ}って、新しい体験を生み出さないのであれば、それは死語です。教えにならない。いただいた方が、教えというものを証明していく。この『仏説無量寿経』も、「我^が聞^かん如^し是^{なり}」（『真宗聖典』1頁、東本願寺出版部）から始まります。生きた宗教体験の伝承、「かくの如くに自分は聞いた」という伝承が伝えてきているものが信頼されて、経典として伝えられてくる。そこに、大乘の経典ということがあるわけです。

いわゆる科学的な文献学のような、対象的な言葉の歴史とか、時代の特定とか、そういう資料探求の眼では、宗教的眞実というようなものは、まるで求めようともしていないのかもしれませんが。宗教的眞実というものは、もともと言葉にならなかったわけで、言葉にならないものを言葉にしたのだから、仏説の根源は言葉ではないのです。言葉をとおして、その根源的なるものを「これだ」といただいてきた歴史が、「仏説」ということを仰ぐわけです。

■ 出世の大事

親鸞は、『仏説無量寿経』を釈尊^{しゆつせほん}の「出世本懐^{しゅつせほん}」であると信じられた。この世に生まれた大事件、一大事、「出世の大事」というものを、親鸞という人は『無量寿経』の釈尊に見いだされた。

人間として生きて、何かいままでの人生と違う人生を感ずるといふことがある。自分の人生だと言えるようなものに出合う。自分の人生は無意味ではないか、むだではないかとまで思われていたのが、それに出合ったことによって本当に意味があると。そういう新しい人生を感ずるといふことは、いろいろな因縁にあるかとは思いますが、宗教的な眞実に出遇うといふことは、苦悩の行きづまりのような闇の中で、そういう新しい考え方、新しい眼、新しい人生観、世界観と言いますか、まったくいままでは見え

なかった新しい見方ができたという体験です。

この世に生まれて、闇の中に生きてきたような感じであったものが、明るみに出たという歓び。そして、それを人に説こうとまで思い立った、そういう内容に出遇った。それを「出世本懐」とか「出世の大事」という言葉が言い当てているのだらうと思います。親鸞は、『無量寿経』のなかに、そういう釈尊を見たのです。これは後を読んでいきますと出てきますが、阿難^{あなん}というお釈迦さまの弟子が、釈尊を光り輝くお姿として仰いだと。これが、釈尊がこの世に生まれた本当の意味なのだ。つまり、お釈迦さまは単に普通の言葉を吐きたかったのではない。光のようなはたらきをしたかった。光のような言葉を投げかけたかった。そういうふうに関親鸞という人は、「光顔巍巍^{こうげんきい}」（同7頁）、釈尊のお顔が光り輝いているというこの経典の内容を、眞実教の証明として『教行信証^{きやうぎんしんじょう}』「教巻」（同152～155頁）に取り上げておられます。親鸞聖人からすれば、いろいろな仏説があるというよりも、これが出世本懐の仏説である。本当に、このこと一つを説くために、自分は一生を生きてきた。このこと一つのために、この世に生まれてきた。そういう歓びに輝くお顔で釈尊は説法を始められた。『無量寿経』は、そういう意味をもっている仏説なのです。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2007年6月 5日(火)午後6時30分～9時
7月17日(火) 同上
8月27日(月) 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分
参考図書：『真宗聖典』（東本願寺出版部発行）

ご希望の方は、下記にてご注文ください。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp>